

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370921

研究課題名(和文) 19世紀におけるフロンティアの地域像に関する日露比較研究

研究課題名(英文) A comparative study of representation of Ezochi on Japanese and Russian maps in the 19th century

研究代表者

米家 志乃布 (KOMEIE, Shinobu)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：30272735

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、19世紀における江戸幕府・ロシア科学アカデミー・ロシア地理学協会などの日本とロシアの国家学術機関が作製した地図類に描かれた「蝦夷地」の地域像を検討することを目的とした。日本で作製された日本図や蝦夷図に描かれた「蝦夷地」像は、江戸幕府天文方が主導した伊能忠敬による測量図(伊能・間宮図)および松浦武四郎による蝦夷図が完成形である。一方、ロシアでの「蝦夷地」像は、帝国アトラスなどの国家機関の地図においても旧態以前とした不正確なものだったことが明らかになった。また、日本の民間における「出版図」を見ても、必ずしも最新の地理情報は繁栄しておらず旧態依然とした蝦夷地のかたちが描かれていた。

研究成果の概要(英文)： In the nineteenth century, the Tokugawa shogunate provided the first accurate map of Ezochi, based on a survey of the areas coastline by Ino Tadataka. The shogunate did this because they wanted to incorporate Ezochi with Japanese territory. Private mapmakers and publishers in Edo, Osaka, and Kyoto continued to publish various printed maps of Japan and Ezochi. The representation of Ezochi was not updated on most privately printed maps. Additionally, maps of Japan and Ezochi that were printed after the survey was conducted continued to rely on incorrect information taken from old maps. The representation of Ezochi on Russian maps also was not updated the survey in the nineteenth century.

研究分野：歴史地理学

キーワード：蝦夷地 北海道 地図作製 日本 ロシア ヨーロッパ 19世紀

1. 研究開始当初の背景

日本の北方フロンティアである「蝦夷地」(現在の北海道部分)および樺太(サハリン)は、日本の地図史上では、長らく「不正確な」かたちで描かれていた「未知の土地」であった。17世紀の松前藩による正保国絵図の蝦夷地部分を見ても、現在の北海道のかたちとはかけ離れた狭小な島として描かれ、その周囲には、千島列島や樺太がさらに小さな島々として描かれているのみである。一方、日本の北方フロンティアは、日本だけでなく、ヨーロッパやロシアの地図史上でも、長らく「未知の土地」であった。そのため、ヨーロッパやロシアで作製された当該地域を対象とした地図上にも、「蝦夷地」や樺太は「不正確な」かたちで描かれており、多くの地図作製者がそのかたちを模写し、それらの情報をもとに手書図・刊行図が作製された。

これらのことから、日本の北方フロンティア地域を対象とした地図作製史およびそこに描かれた地域像を明らかにするうえで、日本国内での地図作製史のみに注目することは適切ではない。地図とは画像情報であり、新しい地図がすべてまったくのオリジナルで作製されることはない。より後世の地図には、すでに存在する複写元の地図情報が必ずあり、それらを編集することが多いため、常に最新の情報が地図の画像に反映されるとは限らない。その点を踏まえて地図の研究を行う必要がある。

2. 研究の目的

本科研では、上記の研究背景を踏まえ、日本およびロシアで作製された地図上に、日本の北方フロンティアである「蝦夷地」とその周辺がどのように描かれてきたのか、両国における従来の研究を整理し、さらに新たな地図史料を用いて明らかにすることを研究目的とする。

その際、まずは、19世紀までのロシアで作製出版された極東(日本を含む)を描いた地図にどのようなものがあるのか、所在調査を行い、合わせてロシアのフロンティアにおける地図作製がどのように行われたのか、基礎的な歴史的事実およびその研究史をおさえることを目的とする。次に、19世紀の日本において作製・出版された地図の状況をおさえ、主要な刊行図(日本図および蝦夷図)も収集する。そのうえで、両者の特徴を比較検討することを最終的な研究目的とする。

3. 研究の方法

ロシアにおける地図史料の所在について、以下の手順で史料調査を行う。

平成25年度・平成26年度は、サンクトペテルブルク・モスクワ・ウズベキスタンのタシケントにおいて、地図の所在調査を行い、ロシアのフロンティアにおける地図作製の状況を調査する。平成27年度・平成28年度はそれらの調査をもとに、分析の中心となる

地図群を決め、それらを閲覧・撮影し、日本での作業に用いる。日本での調査は、平成25年度・平成26年度は、主に刊行図を中心に、日本図・蝦夷図の作製・出版状況を調査する。そのなかで、平成27年度・平成28年度は主な地図史料の分析に絞って、検討する。

4. 研究成果

(1)ロシアの地図作製史において、ロシアのシベリア進出に伴って作製された地図に関する研究は数多く存在する。そのなかでも近年の研究では、ポスニコフによる研究が重要である。ポスニコフは、ロシア革命までのロシアの大縮尺地図の作製史およびロシア人によるシベリアから「ロシア・アメリカ」への進出過程と地図作製史を論じた研究において、ロシアが作製したシベリア図について述べている。また、ロシアの人種地図の作製史を論じたプスヤンチンもシベリア図に触れている。

近年では、アメリカの歴史学者キベルソンが、17世紀から18世紀初期のシベリア図についての研究を行っている。日本においても、1960年代~70年代にかけて、三上正利によるシベリア図に関する詳細な研究がある。また、船越昭生や秋月俊幸による日本北方地域の地図史を対象とした研究のなかでも、ロシア人によって作製されたシベリア図の紹介は行われている。

これらの先行研究において注目されているレーメゾフの作製した地図帳は、そこに所収されたシベリア図は、当該期のロシアによるシベリア図の作製史を論じるうえで重要な地図であることが指摘されている。これらの地図は、17世紀末~18世紀初期のロシア人によって作製された代表的なシベリア図であり、当該期におけるロシア人の持つシベリア地域像を考察するうえで重要な証拠となると思われる。そこで本科研では、各地図帳所収の個別のシベリア図を問題にするのではなく、各地図帳の掲載図全体の特徴からレーメゾフによるシベリア地域像の特徴を把握することを目的とした。なかでも、もっとも後年に作製され編集された『公務の地図帳』を中心に考察した。

その結果、『公務の地図帳』におけるロシア極東のカムチャツカ図は、ロシアにおける最新の地域情報をその図像に表現していたことがわかった。カムチャツカ図のなかでもっとも後年に作製されたと推定される地図は、コズイレフスキーのデータによって作製されたものとしてロシア人研究者の見解は一致しており、当時としてはその図像のなかに最新の豊富な地域情報を盛り込んでいたものであったことが明らかになった。

(2)ロシアでは、レーメゾフ以後の地図として、1734年のキリーロフの「ロシア帝国全図」や1745年のロシア科学アカデミーの「ロシア帝国全図」など近代的な実測図の作製が

行われた。キリーロフの地図においては、ロシア製の地図としては初めて、フリースの蝦夷地が描かれ、サハリンや沿海地方については（早くも）中国の「皇輿全覽図」の影響が見られる。しかし、1745年のロシア帝国全図になると、フリースの蝦夷地は消え、カムチャツカ半島や蝦夷地の部分において、1738年に第2次ベリング探検隊の別隊として日本への調査を行ったシュパンベルクによる成果が取り入れられている。

また、ロシア科学アカデミーのドゥリールによる1733年の「北太平洋地図」は、ベリングの調査のために、当該期のヨーロッパ製の地図情報を駆使して作製しており、フリースの蝦夷地が描かれている。しかし、ベリングの調査が終了した同じくドゥリールの1750年の「南海の北部、シベリア東部およびカムチャツカにおける新発見の地図」においては、ベリングの成果は参照されず、相変わらずフリースの蝦夷地が生き続けた。

(3) ロシアで作製された地図がヨーロッパに大きな影響を与え始めたのは、1758年のロシア科学アカデミーのミュラーによる「北アメリカおよび周辺の未知の沿岸におけるロシア船の新発見地図」、このカムチャツカ半島とクリル諸島の部分についてはクラシェニンニコフの『カムチャツカ誌』付図である。この地図は、北太平洋におけるロシア人の探検・調査の成果を総括したものであり、ヨーロッパ各国の言語に翻訳されたため、ヨーロッパ各国で参照された。1745年のロシア科学アカデミーの「ロシア帝国全図」と比べると、丸くて小さな「マツマイ」島が描かれていることである。このロシア製の地図の特徴は、さらにテツソイ海峡をはさんで大陸東岸にマツマイ島があり、その北方にある「くの字型」のサハリン島との間に大きな空白があることである。

しかし、ダンヴィルの地図はやはり影響力があったようで、1770年代以降には、ダンヴィルの地図で描かれたフリースの蝦夷地が復活した。ダンヴィルは、フリースの蝦夷地を北緯44度で南北に分割し、北半分を「康熙図」のような「くの字型」のサハリン島とし、南半分を半島としたものであり、その南側に東西に長い「エゾガシマ」を描いた。このかたちは、実はロシア製の他の地図や日本製の地図にも広く影響を与えていた。

(4) 19世紀の日本北方地域像に大きな影響を与えたのは、1796年～1797年にかけてのイギリスのプロトンの探検隊の成果である。1804年出版の『北太平洋への発見航海記』の付図である「アジア北東沿岸および日本諸島の海図」に描かれているかたちを見ると、北海道の西岸・南岸や南千島、サハリンの西岸などをかなり正確に描いている。しかし、プロトンは、サハリンを島ではなく、大陸

から延びる「タートル半島」とした。この誤解は、ロシアのクルーゼンシュテルンの調査による地図にも見られる。1804年、ロシアの使節であるレザーノフが長崎に到来した。その際の船長がクルーゼンシュテルンであり、彼はその帰途に日本海を航行して、蝦夷地の西岸やサハリンの南東岸、千島列島などを測量した。その結果を示した1813年の「ナデジダ号による発見と測量図」には、測量によって一段と正確になった蝦夷地の姿を見ることができるとしている。この地図では、サハリンはラベルズの測量と合わせて描かれており、やや細いものの、今日の地図に描かれているサハリンに近いかたちを見ることができるとしている。しかし、サハリンと大陸との関係については、両者は砂州によって繋がっており、サハリンは半島として描かれていることがわかる。また、現在の北海道部分のオホーツク海沿岸には、中間に二つの岬が突出した奇異なかたちをしており、このかたちは19世紀半ばまで他の地図にも引き継がれていくことになる。

(5) 江戸幕府側の作製した日本図や蝦夷図は、明治2年の「北海道」への改名以前に、すでに最新の情報を駆使し、まさに近代的な測量図として正確なかたちに近づいていた。しかし、刊行日本図や刊行蝦夷図などの一枚物の出版地図においては、最新の「蝦夷地」情報はすぐには反映されず、従来の地図が繰り返し模写され続ける状況が続いていた。たとえば、幕末の刊行蝦夷図は、江戸幕府系の地図にある正確な「蝦夷地」のかたちではなく、人々の様々な実用に即したものとして流通した地図であり、そのような地図が幕末日本において多くの版を重ね、かつ同様のタイプの地図が刊行された。

さらに、本科研では、節用集の付図に着目した。節用集所載の日本図においては、寛文年間に刊行された「扶桑国図」が、18世紀から19世紀の100年近くにわたって繰り返し模写され、利用されており、まさに旧態依然とした「蝦夷地」像が民間に長らく流布していたと考えられる。そして、これこそが近世日本の庶民層のもつ「蝦夷地」像にもっとも影響を与えた可能性が高いといえる。

しかも幕末の代表的な節用集である『江戸大節用海内蔵』においては、新しい「蝦夷地」のかたちとして、「蝦夷国図」が掲載された。しかし、ここで描かれた東西に扁平なかたちをした「蝦夷地」像も、江戸幕府が得ていたような最新の「蝦夷地」情報からはほど遠いうえに、さらに明治期になってからも、広く庶民層に受容されていたことが推察できる。

従来の地図史研究において、近世日本における地図の発展は、中世的な「行基式日本図」に代表される日本像から、近代的・科学的地図の前史である近世的日本像への転換、という図式で語られていたといえる。しかし、これは、あくまで、江戸幕府が作製した最新の地図情報入手できる高名な思想家・知識人

層の作製した地図にもとづいた日本像に当てはまるものであり、近世の庶民層にまで浸透していた日本像とまでは言い難いのではないだろうか。

そして、これは近世日本に生きた人々にとっての「蝦夷地」の地域像を明らかにするためには重要な論点である。上述の庶民の日本像のあり方は、直接に「蝦夷地」という地域像とつながると考えられるからである。江戸幕府や知識人層が作製した当該地域の地図や地域情報はあくまで最先端の科学的なものを追求していた。一方、近世の庶民層の「蝦夷地」像は、長い間、「扶桑国図」や「流宣日本図」のようなものであり、幕末になってもなお、旧態依然とした「蝦夷地」イメージであったのである。

このような、「蝦夷地」をめぐる知識人層と庶民層の地理的認識のずれが、近代以降、「蝦夷地」が「北海道」になったことによってどのように解消されていくのか。あるいは近代以降も知識人層と庶民層の間には、この「近世」的な地理的認識のずれは残ったままだったのか。そして近代以降の日本北方地域の地域像がどのようなものだったのか、については今後の研究課題とする。

以上、(1)～(5)の成果により、ロシアと日本の地図上に描かれたフロンティアの地域像を比較検討した。

その結果、両者の地図において、19世紀の段階においても、旧態依然としたフロンティア像が流布し、新しい成果がすぐに反映される状況ではなかったことが明らかになった。今後は、さらに20世紀初頭まで史料を確認し、地図の作製状況を明らかにすることを課題とする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

米家 志乃布、ヨーロッパおよびロシア作製の地図から見る「蝦夷地」像、国際日本学(法政大学国際日本学研究所) 査読無、14号、2017、27-58

米家 志乃布、近世日本における庶民の「蝦夷地」像、法政大学文学部紀要、査読無、72号、2016、131-146

米家 志乃布、近世日本図の北辺・「蝦夷地」表象、文学(岩波書店) 査読無、11・12月号、2015、2-16

米家 志乃布、レーメゾフの「公務の地図帳」と描かれた地域像、法政大学文学部紀要、査読無、66号、2013、41-61

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

米家 志乃布、人びとにとっての近世日

本のかたち、田中優子ほか編『日本人は日本をどうみてきたか』、笠間書院、2015、26-37

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

6. 研究組織

(1)研究代表者

米家 志乃布(KOMEIE Shinobu)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：30272735